

巻頭言：生成 AI と画狂老人記

Preface: Generative AI and “Gakyō Rōjin Manji”

岸井隆幸¹

Takayuki KISHII



黒川先生から当研究所代表理事を引き継いで、既に約9年となります。この間、時代は平成から令和へ進み、コロナ禍があって東京五輪は無観客開催になり、初の女性総理が誕生しました。また当研究所は水道橋に事務所を移転し、設立60周年を迎えています。

そして今、社会にとっても当研究所にとっても非常に大きな変化の風が吹いているように思います。

「生成AI」の登場です。

「生成AIとは何か」をChatGPTに尋ねると、「公開データや許諾されたデータなど多様な情報を学習し、文章・画像・音声など新たなコンテンツを自動生成する人工知能のこと」という答えが返ってきます。「それでは」と、「クライアントの要請に基づいて、多様な情報を収集し、新たなコンテンツを生み出す集団は何か」と尋ねると、その答えは「コンサルティングファーム・シンクタンク」。つまり、ChatGPTが収集・学習するデータの中では「シンクタンク」と「生成AI」はほぼ同義で、「知識集約型サービス産業」なのか、あるいは「装置」なのかという違いしかないこととなります。

では、この両者は併存できるのか？これも尋ねてみました。答えは「十分に併存可能、むしろ相互補完関係が強まる。その理由は、生成AIは大量データの処理・文書や分析の初期案作成・定型業務の自動化に強みがある一方、コンサル・シンクタンクは問題設定・文脈理解・意思決定支援や合意形成といった人間的判断や責任を伴う領域に強みがあるから」だそうです。質問者を見透かして寄り添ってきているようにも思いますが、皆さんの感想はいかがでしょう？

ただ、待てよ、この議論も生成AIが収集・整理した情報に基づいて行われている。つまり、閉じた世界の中のループから出られていない「堂々巡り」で、何も新たなコンテンツを生んでいないのではないか。

通常、今の社会では「問題設定」はクライアントが行うことが多いのですが、そのクライアントが生成AIを使いこなすとなると、コンサルティングファームの存在意義は薄らいでいきます。知識集約型サービス産業が生成AIの時代に生き延びるには、クライアントが十分に認識していない問題を、文脈理解や意思決定・合意形成支援を背景にしながら提起し、次の新しい方向性を掘り起こしていくことが求められているのかもしれません。IBSも心して対処する必要があるように思います。今一度、これまでの世界を超えて新しい変化を考えなければならない。問われているのは、我々にそういう力があるのか、だと思います。

常に新しいものを求めて変化し続けた人物として有名なのは「葛飾北斎」。

世界的にもその評価は高く、西洋にジャポニズム旋風を巻き起こした人物の一人として、ベルギー・ブリュッセルの漫画博物館には「北斎漫画」が掲げられています。

彼は生涯に30回以上改名し、90回以上転居したとされていますが、その変化が彼に「新しい絵を生み出す力」を与えた訳ではないと思います。北斎は90歳近くまでひたすら描き続け、最晩年「画狂老人記」と名乗り、「九十歳より画風を改め、百歳を過ぎてはこの道を改革せんことを願う」と記しています。彼の「絵に対する情熱・執念」が、結果として彼の独創性を生み出しているのであり、呼び名や住処を変えれば北斎になれるわけではない。北斎に負けない「変えたい、乗り越えたい」という情熱を持ち続けることが必要で、「皆さんはその情熱を持っていますか」と、逆に生成AIから問われているように思います。

最後に、性懲りもなく「葛飾北斎のような人物になるにはどうしたらいいか」を、生成AIに尋ねてみました。

北斎は「北斎になろう」としてない、「北斎っぽくなる」という考えをやめろ、という答えでした、なるほど。

1 一般財団法人計量計画研究所 代表理事 博士（工学）